

ステファノの殉教をきっかけにキリスト教会への迫害が起こりました。クリスチャンは捕らえられ牢に入れられましたが、逃れた人々は地方へと逃げていき、逃げた先々でキリストの福音を宣べ伝えました。こうしてキリストの福音は、迫害を受けることによって、少しずつ広がっていったのです。

エルサレム教会で執事をしていたフィリポは、サマリアの町に下って行ってキリストの福音を宣べ伝えました。サマリア地方は、ユダヤ地方の北側にあたります。そしてサマリア地方のさらに北側には、イエス様が宣教活動を始められたガリラヤ地方がありました。サマリアは、南をユダヤ、北をガリラヤで挟まれた地域でしたが、サマリア人はユダヤ人からとても嫌われていました。それは、サマリア人が旧約聖書に記されている大事な神様の約束を破ったからでした。サマリア地方にはもともと北イスラエル王国というイスラエルの一つの国がありました。ところが、イエス様がお生まれになる700年以上も昔、北イスラエル王国はアッシリア帝国に滅ぼされてしまいます。自分の国が滅ぼされてしまった北イスラエルの人々は、生きていくために仕方なくその土地に住んでいた他の民族と結婚していきました。けれども旧約聖書の律法の中には、イスラエル人は他の国の民族と結婚してはならないと記されていたのです。他の国の民族と結婚すると、その相手の国の異邦の神々が一緒に入ってきてイスラエル人の弱い心を揺さぶり、イスラエルの神から離れて異邦の神々を信じてしまうからです。けれども、サマリア人には他に選ぶ道がありませんでした。そこに住んでいる他の民族と結婚しなければ、生きていけなかったからです。こうしてサマリア人は生き残るために旧約聖書の約束を破ってしまい、それが理由でユダヤ人から嫌われてしまいます。ユダヤ人はガリラヤ地方に行くのに、サマリアを通らないでわざわざ遠回りをしていくほどでした。そのサマリア地方にもイエス様の福音が伝えられていったのです。

そのサマリアで「神の力」と崇められていた魔術師シモンがいた町がありました。その町で、フィリポはイエス・キリストの福音を宣べ伝えます。フィリポが宣べ伝えたイエス・キリストの福音は、「神の力」と恐れられていた魔術師シモンを排除していきます。それまで魔術という力によって縛られていた人たちが、宣べ伝えられた御言葉によって解放されていくのです。これが福音の力でした。そして聖書には、とても驚くべきことが記されています。「神の力」と崇められその町で君臨していた魔術師シモンが、13節にありますように、バプテスマを受け、フィリポにつき従っていったのです。魔術師シモンは、自分が行っていた魔術が偽物であることを知っていたのでしょうか。神の賜物が自分の魔術よりはるかに優れていることを知ると、シモンはあっさりと降参したのです。このフィリポの働きがうわさとなってエルサレムまで届き、エルサレム教会はペトロとヨハネをサマリア地方に派遣します。ペトロとヨハネは力ある業と聖霊によるバプテスマを授けていきました。その様子を見て、魔術師シモンはお金を持ってきてこう申し出るのです。「わたしが手を置けば、だれでも聖霊が受けられるように、わたしにもその力を授けてください」。魔術師シモンは神の力に感激し、どうしてもそれを得たいと願ったのでしょうか。けれども神の賜物はお金では決して手にすることはできません。いやむしろ、お金や自分の持ち物などと引き換えに神の賜物を手にしようとする人には、かえって与えられないのです。

これは、私たちが行っている毎週の礼拝と似ています。礼拝での恵みは、いくらお金を積んでもあずかることはできません。神様から招かれた人たちが霊とまこととをもって礼拝する。その時に初めて、礼拝を捧げる人々は神の賜物にあずかることができる。神様からいただくことのできる、言葉にできない喜びと祝福がある。ここから歩いていける希望と勇気とが与えられる。それは決してお金で買うことはできないもの。私たちが自分自身を献げなければ得られないものなのです。

ペトロは魔術師シモンに向かって、こう答えます。「この金は、おまえと一緒に滅びてしまうがよい。神の賜物を金で手に入れられると思っているからだ。お前はこのことに何のかかわりもなければ、権利もない。お前の心が神の前に正しくないからだ」。神の前に正しくなければ、礼拝に招かれることもなく、神の賜物をいただくことも、祝福を受けることもできないのです。私たちの礼拝の姿勢、神の御言葉に向かう姿勢が問われています。しかし、その後続くペトロの言葉は、私たちに安心感を与えます。ペトロは続けてこう語ります。「この悪事を悔い改め、主に祈れ。そのような心の思いでも、赦していただけるかもしれないからだ」。魔術師シモンのような腹黒い者でも、悪事を悔い改め、主に祈るならば、赦していただけることができるかもしれない。ペトロはそう語るのです。

魔術師シモンはサマリア地方の人々の心を奪うほどの魔術を行いました。私たちが生きているこの社会にも、お金を集めるために宗教を利用したにせの新興宗教がたくさんはびこっています。その多くは、人々の心を奪うほどの魔術的なことを行っています。けれども、いかに人の心を奪う奇跡的なしるしを行ったとしても、自分たちの教団の資金を集めることが目的になっていれば、それは偽物というよりほかありません。そしてこのことに関しては、私たちキリスト教の教会もよくよく気をつけなければなりません。私たちの伝道も自分たちの教会が大きくなるためというように自己目的化するならば、まことのキリストの教会から離れていくことになってしまいます。今日の聖書の箇所(20節)の後半に記されていますように、神の賜物は決してお金では手に入れることができないのです。

魔術は、マジックのような人を惑わすような技術、あるいは秘密の呪文を用いて行われます。魔術を施す人は、その技術や呪文を自分の道具として用います。自分の目的を達成するために技術や呪文を用いて、その力を行使するのです。それに対して神の賜物は、むしろ神の力の前にひれ伏す姿勢が大切です。その力を自分の支配下に置くというのではなく、神様の偉大な力の前にひれ伏して、その神様の力の担い手として私たちが遣わされる。私たちに力があるわけではありません。私たちが神様の力を預かって遣わされていく。ですから、神の賜物を自分の思い通りに使おうとする者や、神の力を自分の支配下に置こうとする者には、神の賜物は与えられないのです。神の賜物はお金で手に入れることができるようなものではなく、私たちの支配のもとに置くことができるものでもないのです。

それでは現実の問題として、私たちの目の前で起こる奇跡的な出来事に対して、それが神からのものなのか、それとも人を惑わす魔術的なものなのか、私たちはいったいどのようにして判断すればよいのでしょうか。

私たちバプテスト教会では、教会学校を大切にしています。キリスト教の教会の多くは、教会学校は子どものクラスしか持っていません。けれども私たちバプテストの教会では、一生涯が学びの時であると成人科の教会学校を大切にしています。そして私たち日本バプテスト連盟の教会学校では、教師が学んできたことをクラスの生徒に伝えるのではなく、

それぞれのクラスのメンバーが聖書を読んで感じたこと、聖書をどのように読んだかを分かち合い、互いに語り合い、聴き合うことを大切にしています。ですからこの教会学校においては、もう教師と生徒という形ではなく、クラスをリードするリーダーとメンバーという区分になります。このような形の教会学校では、教え育てる「教育」ではなく、共に育つ「共育」を目指します。共に育つ。バプテスト教会はそれを共同学習という形で、成人科の教会学校の中で実現してきました。共に学び、共に育つ。ですからバプテストの教会学校では、誰かが一方的に話したり、他の人たちがただ聞いているだけではなく、みんなで語り合い、みんなで聴き合います。それが共同学習としての教会学校の姿です。そして教会学校は教会の学びをする場所でもあります。ですから、聖書を脇に置いたままで御言葉に聴くこともせず、ただそれぞれの意見や思い、経験だけを語る場ではありません。メンバーみんなが互いに聴き合い語り合う場としての教会学校は、その中心に常に聖書があり、みんなで聖書から聴き合い語り合う場なのです。なぜなら、聖書の御言葉にこそ力があるからです。先ほど私たちは、魔術的なものと神の賜物との違いを見ました。力を自分の支配下に置こうとする魔術に対し、神の力の前にひれ伏すのが神の賜物のあり方です。教会学校も神の言葉である聖書の御言葉の前にひれ伏すのです。聖書の御言葉にこそ力があるからです。私たち人間の思いではなく、人間の力でもなく、聖書の御言葉こそ私たちが生かす神の力なのです。聖書は、人間を生かす神の言葉であり、また神に生かされてきた信仰者が歩んできた信仰の言葉なのです。この共同学習である教会学校において、共に学び共に育っていくプロセスの中で、私たちの信仰が育ち、何が本物で何が偽物なのか、何が神の賜物で何が人を惑わす魔術的なものなのか、判断することができるようになります。そして、そのような共同学習の場で働くのが、聖霊の力です。聖霊の働きは、共同学習の形にも見られるように、互いに語り合い、互いに聴き合う中で、それぞれの違いを大切にしながら共に一致していく。それこそが聖霊の働きなのです。そこには、人々を分け隔てる分裂があってはなりません。聖霊なる神様は、私たち一人一人の思いを大切にしてください。使徒パウロは、ローマの信徒への手紙 8 章 26 節以下で、聖霊の働きについて、次のように述べています。新約聖書 285 ページです。【同様に、“霊”も疑い深いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきか知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもってとりなしてくださいからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださいからです。】 聖霊なる神様御自身が、どう祈ればよいかわからない私たちの心を見抜いてくださり、うめきをもって私たちを執り成してくださいというのです。ですから私たちも、教会に集うお互いの、言葉にならないうめきの声にしっかりと耳を傾け、聴いていかなければなりません。そしてパウロはさらに続けてこう語るのです。8 章 28 節、【神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。】 このようにキリスト者は、聖霊に導かれて万事が益となるように、共に働くのです。

私たちも聖霊に導かれながら、魔術ではなく本物の福音を見極めることおができるように、教会学校で共同学習に励んでいきたいと願います。そして、教会の仲間と共に神の言葉を学び続け、福音を語り続けていきましょう。

お祈りします。